

平成8年度心身障害研究
「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

平成8年度研究総括報告
(分担研究：女性の健康に関する研究)

分担研究報告書

分担研究者 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター
原 ひろ子

I. 研究の概要

リプロダクティブ・ヘルス/ライツについては、1994年カイロ国際人口・開発会議をもって、ようやく世界的な認知が得られ始めた感がある。今年度より新たに発足した本研究を分担する原ひろ子班では、24-45歳までの年齢層にある女性に焦点をあて、従来の「健康」概念とはやや異なる広い視点で「生涯を通じた女性の健康」を見つめながら、「医療」と「医療」以外の領域を含めた「生活空間」における女性の健康の望ましいあり方について考察・検討していくことを目的としている。その際、生活する女性の視点を重視して研究を進める。

1. 女性の健康に関する効果的ネットワークとはどのようなものか
2. 望まない妊娠の実態およびこれを防止するための具体策はどのようなものか

II. 研究方法と研究組織

1. 女性の健康に関する効果的なネットワークのあり方と地域の社会・文化的事情との関連を探るため、各研究協力者（柘植・佐道・阿古）がそれぞれカナダ、大阪、北九州における事例研究を実施している。本研究の特徴とは、1)医学的な側面と社会的な側面の両方から総合的にネットワークを考察していることと、2)本研究を通じて集まった、異なるバックグラウンドをもつ研究協力者たち自身がネットワークを形成しつつある点を挙げることができる。

2. 各研究協力者（荻野・宇野・東・原）は、北九州、広島、大阪、京都、東京において事例研究を行い、実態と各地域の社会的文化的な事情との関連を探っている。また、内外の先行文献を展望し、望まない妊娠の防止のための具体策を、制度、施設、および個人のエンパワーメントの視点から検討している。

III. 結果

1. 女性の健康に関する効果的なネットワークとはどのようなものか

従来の、行政による女性の健康に関する施策は、以下の2点において不十分であったと考える。まず第一に、女性の健康を「母性」という限られた範囲を中心としていたこと、第二に、それに対して保健・医療がいかなる制度や施設・設備を用意するかに関心が絞られてきたことであろう。しかしながら、生活者としての女性の現実、生まれてから死ぬまで、地域/社会の中で人と人とのつながりに支えられて、健康に関する諸課題に対処しているものである。その際、女性が自分の健康のためにどのような行政との関わり・支援、および生活者間のネットワークが必要であるかを認識すること、そのために情報を得る事、それをもとに社会（医療・福祉等）のあり方について働きかけていく事が必要である。今日の日本において、ネットワークが機能しつつあると推定される事例を取り上げ、今回の調査研究を実施した。調査結果の分析に際しては、このようなネットワークを有効に機能させるために何が必要なのか、行政と民間のネットワークが相互にプラスの効果を示すど

のような可能性があるのか等について検討する。

1-1. カナダ・モントリオールにおける女性の健康に関するネットワークの事例研究（柘植あづみ）

ネットワーク分析をするに当たって、まず、リサーチクエスションの概念的な検討を行った。「健康」/「生涯を通じた女性の健康」とは何か、という事については様々な立場があるが、ここでは「からだ（心身）がより（心地）よい状態」のことを指すものと確認した。また、なぜ「ネットワーク」なのかという点については、横の連帯によるネットワークは縦型の組織を「柔軟」に補完する機能をもつと仮定した。さらに、「効果的」については、女性の生涯を通じて、様々な心身の状態や多様なライフコースによって生じるニーズに応えることと理解した。

さらに、女性の健康に関するネットワークについての事例研究として、カナダ・モントリオールにおいて女性のからだに関する活動を実施する個人・組織への聞き取り調査を行った。その結果に基づき、1)なぜそのネットワークが必要とされているのか、2)個々の女性から、いかなる活動とサービスがネットワークに要請されているのか、3)効果的な活動を実践するためにネットワークが必要としているものは何か、について考察する。

1-2. 医療機関の場からみた社会的ハイリスク妊産婦（佐道正彦）

多くの女性が妊娠・出産という、人生の場面で重要な節目を経験するが、それらの女性たちは決して同質的な社会の構成者ではない。本研究では、大阪の産科施設で得られた約300の社会的ハイリスク妊産婦の例に注目し、こうしたケースへの支援の手だてについて考察する。また、医療機関内での診察科、スタッフ職種を越えたカンファレンスの場が必要である点について提言する。

1-3. リプロダクティブ・ヘルス/ライツが女性の手に渡るまでのネットワークづくりについて（阿古安子）

先行研究では、女性のライフサイクルを通じての健康に総合的な援助が提供・想定されていないことが指摘されている。これを受け、本研究では2つの事例を通じて、女性のライフサイクルを保健・医療・福祉の観点から総合的に考えることを試みる。また、ネットワークの効果に影響する様々な規定要因に言及する。

2. 望まない妊娠の実態およびこれを防止するための具体策はどのようなものか

従来の望まない妊娠に関する研究においては、不確実な避妊の結果として、あるいは「不幸な中絶」の原因として論じられる事が多く、その因果関係を根絶するために医療現場におけるカウンセリングの重要性が指摘されるに留まってきた。しかし、より具体的かつ効果的な予防策を実施するに当たっては、女性が望まない妊娠に至るまでの社会・心理的プロセスを解明する事が必要であり、本研究では、従来十分に議論されてこなかった「生殖のジェンダー化」あるいは「当事者の理論あるいは論理」に特に注目して検討を行った。その結果明らかになった「エンパワーメント（自ら力をつける事）」の重要性を論じると共に、行政と民間団体の連携によるプログラムを紹介するなど、具体的な政策について提言する。

2-1. 女性のreproductive goal達成に関する考察（東優子）

国内の先行研究文献を中心にレビューし、現代女性が抱く「産む、産まない」「いつ」「何人」というreproductive goal（生殖に関する目標）達成過程において生じる現実とのギャップについて考察する。特に、中絶というものが非常にミクロ（個人的）レベルな問題であると同時に、マクロ（社会）レベルの要因に影響を受けている点に注目する。

2-2. 『望まない妊娠の実態および防止策』研究のためのアプローチに関する提言（荻野美穂）

「望まない妊娠の実態および防止策」について考察する上で、従来十分に考慮されてこなかったと思われる側面について検討を行うことにより、この問題に対してどのような発想からアプローチしていくことが必要かを提言する。国内外の先行文献の検討、および助産・産婦人科業務に携わる専門家へのインタビューを通じて見えてきたものは、a. 避妊

方法の選択における当事者の論理、b. 望まない妊娠や中絶が生じる選択プロセスはどのようなものか、c. 避妊とジェンダー、とくに男性との関わりである。

2-3. 望まない妊娠の実態およびこれを防止するための具体策はどのようなものか (宇野澄江)

不確実な避妊方法が望まない妊娠をもたらしているとして、従来の様な医療側からのアプローチに加えて、実際に望まない妊娠をする女性の立場から、また避妊を実行したり教育や相談サービスの受け手である女性の立場から考えてみると、違った側面が見えてくる。本研究では、「知識と行動のギャップ」「エンパワーメント」といった概念を活用して当該課題を考察し、民間機関(NGO)が実施するジェンダー・トレーニングの例を紹介しながら、政策的提言を行う。

IV. 今後の研究方針

女性の健康と権利を保障する上で、政府が重要な役割を担っていることは言うまでもない。国家の法律や政策は、女性の人間としての位置づけられ方や女性役割に対する社会の見方を反映するものである。それは必要とする手段を奨励することもできれば、封鎖することもできるのである。そこで原班では、事例研究を中心に、期待される行政の取り組みについて提言することを研究の最終目的としたい。

(1)日本のネットワークの現状と問題点を明らかにするため、女性センター、保健所、医療機関など、ネットワークにかかわる可能性のある機関・組織で行われている具体的な健康相談活動の諸事例について、より広汎に調査を進める。また同時に、女性たちにとって望ましい相談施設のあり方に関する意識調査および事例調査を行う。これらの作業に基づき、提言を行う。

(2)望まない妊娠や中絶を単に「避妊の失敗」と捉えるのではなく、こうした結果に至るまでの具体的プロセスを解明するために、事例に基づく総合的・学際的なきめこまかい調査を行い、当事者の論理、社会システム(組織・ネットワークを含む)について考察する。また、種々の避妊法に関して、それらを利用する当事者が感じている社会的・文化的・心理的コストについて探り、またどうすればそれらのコストを減少させられかを検討する。これらの作業に基づき、提言を行う。

Abstract

Studies on Women and Their Health HARA, Hiroko

Women's reproductive health and rights came to world wide attention after the UN International Conference on Population and Development held in Cairo in 1994. Focusing on women in Japan aged 25-44, this paper examines women's health not only from a media perspective but also in the domain of everyday life and women's subjective world, and asks the following questions:

1. What is an effective women's health network?
2. What kinds of concrete policies exist for unwanted pregnancies and their termination?

In next year's research, we plan to use case studies to investigate social systems and social policies which not only best respect women's health and rights but are also most desirable for avoiding and correcting gender bias, and hope if possible to make concrete policy proposal: from the results of this research.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究の概要

リプロダクティブ・ヘルス/ライツについては、1994年カイロ国際人口・開発会議をもって、ようやく世界的な認知が得られ始めた感がある。今年度より新たに発足した本研究を分担する原ひろ子班では、24-45歳までの年齢層にある女性に焦点をあて、従来の「健康」概念とはやや異なる広い視点で「生涯を通じた女性の健康」を見つめながら、「医療」と「医療」以外の領域を含めた「生活空間」における女性の健康の望ましいあり方について考察・検討していくことを目的としている。その際、生活する女性の視点を重視して研究を進める。

1. 女性の健康に関する効果的ネットワークとはどのようなものか
2. 望まない妊娠の実態およびこれを防止するための具体策はどのようなものか